

テオソフィア

T H E O S O P H I A

J a n u a r y & F e b r u a r y

T O P I C S

APHORISM

神智学の要約

神智学の鍵

実践的オカルティズム

今月の ひとこと

2019年5月で新年度となります。年度で更新の会員様はお手数ですが新年度年会費のお手続きをいただくと幸いです。2018年度の途中で入会された会員様は入会月ごとの更新となります。

大きな教団や協会などと比べれば日本の神智学協会は小さなものですが、それでも智慧を学ぼうとする方々がいらっしゃるということはありがたいことです。

新年度も智慧の普及に少しでも役立つことができればと思う次第です。

会長 岡本

テオソフィア

3・4月号 vol.42

神智学協会ニッポン・ロジ会報誌

APHORISM	1
神智学の要約	2
神智学の鍵	4
実践的オカルティズム	10

APHORISM (第 24 回)

高橋 直継

知識がないことの利点

それについて知識がないということは、それに対する先入観なしにそれを観ることができるという利点がある。

芸術家の発する言葉

芸術家の発する言葉というのは、あくまで自分の感覚を通して得た経験を自分の言葉で正直に表現したものが多いという点で魅力的である。

0.1%に過ぎないネット・クレーマーに翻弄される社会

ほんの一部の無教養でげすな連中のために、どうして多様で豊かな表現や文化が次々に潰されなければならないのか？

宗教に対する疑念

歴史上、宗教が戦争の原因になった事例は枚挙にいとまがないが、宗教が戦争を防いだ事例がこれまでにどれだけあっただろうか？

* APHORISM の連載は、本号をもちまして、しばらくお休みさせていただきます。

長い間お読み頂き、ありがとうございました。(高橋)

『睡蓮の牧歌』

著：メイベル・コリンズ

訳：星野 未来

電子書籍 Kindle 版

定価 333 円

【本書について】

神智学の世界でも有名なメイベル・コリンズによる物語。いにしえのエジプトで主人公センサが体験したこと。「この物語は恐らく実話であろう」(T・スバ・ラウ)とされています。欲望のむなしさ、魂の悲劇。



神智学の要約 2

著：W・Q・ジャッジ 訳：星野 未来

次に述べるのは神智学の基本的な主題のいくつかである。

人間の霊は、その人の存在で唯一、現実で永久不変な部分である。その人の他の性質はさまざまに複合されている。そしてすべての複合物に退廃が付きものであるため、人の中の霊を除くすべてのものは永久的なものではない。

さらに、宇宙は多様なものではなく一つのものであり、その中のすべてのものは全体と、そして全体の中の他者すべてとつながっており、(後に述べる)より高い界層には完全な知識があつて、それを認識し気づいている大きな全体の各部分がなければ、どんな思考も行動も起こらないのである。それゆえ、すべてのものが「同胞団」のきずなで不可分に結びつけられている。

神智学のこの第一に基本となる主題は、宇宙がさまざまな統一体の集まりではなく、全体が一つであると主張する。この一つである全体は、西洋の哲学者に「神」(Deity)と名付けられ、ヒンドゥー教のヴェーダーンタ学派に「パラブラフマ」と呼ばれる。それは、その顕現を支配する法則とともに、すべての顕現の形態を潜在的に含んでいる「未顕現のもの」と呼ばれるかもしれない。さらに、神学的な意味での世界の創造はなく、世界の出現は厳密に進化によって起こると教えられている。定期的に未顕現から客観的な宇宙として顕現する時が来ると、「力」またはいわゆる「造物主」(The First Cause)が生まれる。なぜならそれ自身が「原因」(Cause)の根なき根であり、東洋で「原因なき原因」と呼ばれるものだからだ。「造物主」は、「ブラフマー」や「アフラ・マズダー」や「オシリス」または好きなように呼ぶことができる。影響力の時またはいわゆる「ブラフマーの息」への投影は、すべての世界とそこにいる存在たちを徐々に出現させる。その影響が進化の中で進行し続ける限り、それらは現れ続ける。測り知れない長い年月「息」が吐かれた後、進化の影響力は弱くなり、宇宙は暗く覆い隠され始め、あるいはプララヤに入り始め、「息」が完全に吸い込まれ何も物体の残っていない、ブラ

フマの他には何もない状態になるのである。学徒は、ブラフマ(非人称的なパラブラフマ)と顕現したロゴスであるブラフマーとを区別するよう注意する必要がある。この(プララヤに入る)働きに作用する手段についての解説は、この『要約』にそぐわない論題であるが、神智学でも扱われる。

この外へ吐き出す息はマンヴァンタラあるいは二人のマヌの間(マヌとアンタラつまり「間」から来た語)として知られ、吸う息の完了はプララヤつまり滅亡をもたらす。これらの真実から「創造」と「最後の審判」という誤った教義が生まれた。このようなマンヴァンタラとプララヤは永遠に起こって来たり、定期的に、永遠に、起こり続けるだろう。

マンヴァンタラのために2つのいわゆる永遠の原理が、仮定として主張されている。それはプルシャとプラクリティ(あるいは霊と物質)である。なぜならこの両方は各顕現において常に存在しており、結合しているからだ。これらの用語がここで用いられるのは、英語に相当する語がないからである。プルシャは「霊」と呼ばれ、プラクリティは「物質」と呼ばれるが、このプルシャとは未顕現の霊ではなく、プラクリティは科学で知られているような物質ではない。アーリア人の賢者たちはそれゆえ、「プルシヨッタマ」(訳注1)と呼ばれる、さらにもっと高い霊があることを断言する。その理由は、ブラフマーの夜またはいわゆるブラフマーの吸う息において、プルシャとプラクリティの両方が非顕現の中に吸収されるのである。基本的概念が同じである表現が聖書の中にあり、「父の懐にいる」と言う。

これは「智慧の宗教」の賢者たちに解説されたように普遍的な進化の教義へと私たちを導く。その教えによると、プルシャ(霊)はブラフマから発し、同時に進化する物質のさまざまな形態を通して進んでいく。それは霊的な世界において最高の形態から始まり、物質的な世界では最も低い形態から始まる。(訳注2)この最も低い形態は、現代科学にまだ知られていない。このように鉱物、植物、動物の形態はそれぞれ不可分のプルシャの一部である神の火花を

閉じ込めている。

これらの火花は「父へ戻ろうと」奮闘し、あるいは言い換えれば、自己意識を獲得し、ついにこの世で最高の形態を得る。それは人間の形態で、それだけが彼らに自己意識を持つことを可能とするものだった。人間の時間で計算されたこの進化が続く期間は、何百万年にも及ぶ。それゆえ神性の火花の一つ一つはその使命をなしとげるために莫大な年月を有する。その使命とは、人間の形態にいる間に完全な自己意識を獲得することである。しかしこのことは、ただ人間の形態の中に入るといふ行為がこの神性の火花に自己意識を与える、ということの意味するのではない。その偉大な成果は、神性の火花が人間の形態に達するマンヴァンタラの間、成し遂げられるかもしれないし、成し遂げられないかもしれない。すべては個別の自我それ自身の意志と努力しだいなのだ。このようにして個々の霊はそれぞれ自分自身と全体の利得のためにマンヴァンタラを経験するか、または顕現を始める。マハートマとリシたちはこのようにマンヴァンタラの間、徐々に進化して、その終わりに将来他の惑星になる者たちの進化を導く惑星霊になる。私たちの惑星である地球の惑星霊は、前のマンヴァンタラあるいはブラフマーの昼において努力して、その長い期間の過程でマハートマになった。各マンヴァンタラは同じ結果と目的のためにあるから、今それらの高い地位に達してしまったマハートマあるいは、現マンヴァンタラでこれからその地位に達するかもしれない人たちは、たぶん次のマンヴァンタラでこの地球か他の惑星の惑星霊になるだろう。この説はこのように霊的存在の同一性に基づいて見られており、そして「普遍的な同胞愛」の名のもとに、その同胞愛を人々の間に実現する目的を持つ神智学協会の基本的な考えを構成する。

賢者は、この「プルシャ」はすべての顕現した物の基礎であると言う。それがなければ何も存在しないか、あるいは凝集しない。プルシャは何とでもことごとく、いたるところで互いに浸透し合う。プルシャは現実のもの、あるいは私たちがただのイメージにすぎないのに現実と呼ぶものの基礎となる現実のものである。プルシャがすべての存在に広がり、そして包含するにつれ、すべての存在は互いに結び付く。そしてプルシャが存在する界層上または界層の中に、すべての行為、思考、物体、環境の完全な意識が、それらの起こることになっている場所で、あるいはこの界層で、またはそれ以外の所に、あるのである。霊より下と知性より上は、中に経験が書き留められている意識の界層であるため、一般に人間の「霊的本質」と呼ばれている。これはしばしばその人の体や知性と同じくらい文化の影響を受けやすいと言われている。

(つづく)

* 1 Purushottama… プルシャ (spirit) + uttama (highest) つまり至高のプルシャ。至高の存在、至高の神。

* 2 「同時に進化する物質の様々な形態」の最高のものは(私に分かる限り) 7人の智慧の息子たちである。「最も低い形態」を突き止めるのは難しい。その2つの進化(霊的と物質的)の進路は第3根本人種の後半に交差して、三番目の進化(精神的、intellectual)を生み出す。SDの上下両方は3つの進化に触れる。(ジェフ・クラーク氏)

神智学の鍵

著：H・P・ブラヴァツキー 訳：田中 恵美子

絶滅とはどんなことか

- 【問】 ある神智学徒達が自分の生涯を全てつなぐ金の糸について話しているのを聞いたことがあります。これはどういうことですか？
- 【答】 ヒンズー教の聖典では、周期的な化身をするものは、ストラートマであると言われています。ストラートマとは文字通りでは「糸魂」という意味です。これはブッディと結合したマナスである輪廻する自我と同意語で、私達の前の生のすべてのマナス的な思い出を吸収するものです。一本の糸に連なる真珠のように、人間のいくつもの人生の長い長い連続もその一本の糸でつなぎ合わされているので、糸魂というのです。ある『ウパニシャッド』では、この世とあの世を行きつ戻りつする再生の周期は、睡眠と覚醒の間に揺れ動く人間の生活にたとえられています。
- 【問】 それはあまり明瞭ではありません。なぜかと言えば、目が覚めると新しい日が始まりますが、その人間は魂も体も前の日と同じ人です。けれども化身するごとに、身体や性や人格が全く変わるだけでなく、知的およびサイキック的能力さえも変わります。ですからこのたとえは全く正しいとは私には思えません。眠りから覚めた人間は昨日したことをはっきり覚えていますし、何か月も、何年も前のことも覚えています。しかし、私達は誰も前生のことや前生関係の事実や出来事は少しも覚えていません。……昨夜、夢で見たことは朝になると忘れていたかもしれませんが、それでも私は眠ったということや、眠っている間も確かに生きていたことは知っています。けれども死ぬ瞬間まで過去生について、私は何を思い出することができるのでしょうか？ このことをあなたはどうか納得させますか？
- 【答】 ある人達は生きているうちに過去生を思い出します。しかし、こういうことができるのは仏陀やイニシエート達だけです。これはヨギが三藐三菩提(さんみゃくさんぼだい)、すなわち過去生の全連鎖の知識と言っているものです。
- 【問】 しかし、三藐三菩提に達していない私達普通の人間は、どのようにこの比喩を理解したらよいのでしょうか？
- 【答】 比喩についてもっと深く考えて睡眠の三種の種類とその特性をもっと正しく理解することです。睡眠の必要性は獣類にも人間にも一般的で不変なものですが、睡眠にはいくつか種類があり、夢やヴィジョンにはなおさら様々なものがあります。
- 【問】 しかし、それは問題が違います。唯物論者に戻しましょう。唯物論者はもちろん夢を否定することはできませんが、一般的に不死を否定し、自分の個性が生き残ることを否定します。
- 【答】 そのような唯物論者は知らないで正しいことを言っています。自分の魂についての内的知覚力がなく、信念もない人の場合には、魂はブッディ・タイジャサになることは決してできず、単なるマナスのままです。そしてマナスだけでは不死ではあり得ません。あの世で意識的に生きるためには、まず第一に、この世で生きている間に死後の生命を信じなければなりません。死後の意識や魂の不死性についてのすべての哲学は、秘密科学のこの二つの金言に基づいています。自我はいつもその功罪に従って報いを受けます。体が分解したあと、完全に目覚めた意識の時期か、または混沌とした夢の状態、あるいは絶滅と区別することのできない全く夢のない睡眠が始まります。これらの状態が睡眠の三種の種類です。もしも生理学者達が、夢やヴィジョンの原因が覚醒時に無意識に用意されていると考えているなら、なぜ死後の夢が生きている間に用意されているのを認めることができないのでしょうか？ 私は繰り返して言います。死とは眠

りです。死後、魂の霊的目の前で、私達自身が学び、度々無意識に作曲してきたプログラムに従って演奏が始まるのです。つまり、正しい意見や自分が作った幻影の実現です。少なくともしばらくの間は、各人の作った完全な幻の楽園で、メソジスト信者はメソジスト信者になり、イスラム教徒はイスラム教徒となります。これは生命の木の死後の果実です。当然、私達が意識的な不死の事実を信じても信じなくても、事実そのものの無条件の真実性に影響を与えることはできません。しかし、独立したそれぞれの人達が不死であると信じるか信じないかは、このような者達の一つひとつに必ず影響を与えます。分かってきましたか？

【問】 だんだん分かってきました。唯物論者達は五官が不完全であるにもかかわらず、それによって備えられたデータに基づいた科学的推論で証明できるもの以外は何も信じないので、あらゆる霊的現象に反対し、この世の人生を唯一の意識的存在であると思っています。彼等の場合は、そう信じているので本当にそうなるということですね。彼等は人格的な自我を失い、新しく目覚めるまで、夢のない眠りに陥ることになるとおっしゃっているのですか？

【答】 大体その通りです。地上と霊的という二種類の意識的状态があるという、ほとんど普遍的な教えを覚えておいて下さい。霊的意識は、永遠不死のモナドがその中にあるので、それは本物と考えなければなりません。けれども肉体に化身している自我は前生とは全く違う新しい衣をまとっており、その衣には霊的原型以外のすべてのものは、あとに何の形跡も残せないほど徹底的に変化してしまっているという運命にあります。

【問】 どうしてそうなるのですか？ 地上に意識をもつ私の「私」は唯物論者の意識のようにしばらくなくなるだけでなく、何の形跡も全く残さないで消えるのですか？

【答】 神智学の教えによれば、完全になくなってしまいます。ただ、モナドと結合して、純粋に霊的で不滅な本質となり、永遠で一体である本質だけが残ります。しかし、全くの唯物論者の場合には、人格我にブッディが反映したことがないのに、どうしてブッディがその人格我を永遠へと運んで行くことができるのでしょうか？ 一つの分子すら運ぶことはできません。あなたの霊的「我」は不死ですが、それはあなたの現在の「私」から不死にふさわしいものだけ、すなわち死によって刈り取られた花の香りだけを永遠へと運んで行くことができるのです。

【問】 では、この世の「私」という花はどうなるのでしょ

うか？

【答】 その花は一つの根、つまり、ブッディの子供等として母なる枝のストラトマに咲いた過去の花、これから咲くはずのすべての花のように塵(ちり)に戻るでしょう。あなたの現在の「私」はあなた自身が知っている通り、私の前に座っている体ではありませんし、私はそれをマナス・ストラトマとも言いません。それはストラトマ・ブッディです。

【問】 しかし、なぜ、死後の生命は不死、無限、真実であって、この世の人生は単なる幻影と言われるのか、私には分かりません。この世の人生の制限よりもどんなに広いと言っても、死後の命にはやはり制限はありますか？

【答】 全くそうです。人間の霊的自我は誕生と死を振り子のように行ったり来たりします。しかし、たとえこの世の生命と霊的世界での生命の期間に限界があり、睡眠と覚醒の間、幻影と真実の間の境界を示す誕生と死の数も限られており、その連続には始まりと終わりがあるとしても、一方、霊的巡礼者は永遠に生きています。従って、「輪廻」と言っている巡礼の期間中は、一時的なこの世の存在の蜃気楼ではなく、人間の死後、肉体をなくした人が真実と面を合わせている時こそ、私達の考えでは唯一の現実であります。そのような合間はたとえ制限はあっても、自我は何の妨げもなく、しだいにではありますが自らを完成しながら、脇道にそれることなく、最後の変質への道を辿ります。そして自我がゴールに達した時、神聖なものとなるのです。こうした合間や段階は自我を妨げるのではなく、むしろ最後のゴールへと進んで行くのを助けます。そして神聖な自我はこのように制限された合間がなくては、究極のゴールに達することはできません。私はすでに自我、すなわち個性を役者にたとえ、自我の様々な化身を役者の演ずる役割にたとえて、例をあげて説明をしました。このような役割や衣裳をあなたは役者自身の個性だとは言わないでしょうか？ この役者のように、自我はパラニルヴァーナの入口に至るまで、自分には不快であるかもしれないたくさんの役割を、必然性の周期の間中ずっと演じなければなりません。しかし、蜂が花から蜜を集め、残りをこの世の虫の食物として残すと同じように、私達がストラトマとか自我とか言っている霊的個性も、各人生のエッセンスを集めます。カルマに押しつけられた、すべてのこの世の人格我から、霊的特性と自意識のネクターだけを集めて、すべてを一つの総合体に統一し、栄光あるディヤーニ・チョーハンとして蛸の状態から出てくるのです。自我が何も集める

このできなかつたこの世の人格我はどうしようもありません。そんな人格我は確かにこの世を去つたあと、残ることはできません。

【問】 それでは、この世の人格我にとって、不死ということとはやはり条件付けられています。すると不死そのものは無条件ではないという意味ですか？

【答】 決してそうではありません。しかし、不死性は実在しないものに当てはめることはできません。サットとして実在するもの、あるいはサットから発散しているものすべてにとって、不死と永遠とは絶対的なものです。物質は霊の反対の極ですが、この二つは一つなのです。このすべてのエッセンス、すなわち霊、力、物質という三位一体は無始であると同時に無終です。しかし、化身中にこの三位一体から得た形体、その外形は確かに私達の個人的概念の幻影にしかすぎません。従つて私達は涅槃と普遍的生命だけを真実と言い、この世の生命もその人格我も、またそのデヴァチャンでの存在さえも幻影の領域と考えます。

【問】 なぜ「睡眠」を現実と言い、「覚醒」を幻影と言うのですか？

【答】 睡眠と覚醒とはただその問題を理解しやすくするための比喩にしかすぎません。この世の観点から見れば、極めて正確な比喩です。

【問】 もし未来の生が正義に基づき、また、私達のあらゆるこの世の苦に価する報復に基づいているとすれば、唯物論者の場合、その人達の多くは本当に正直で慈悲深い人達なのに、どうしてその人達の人格我はしおれた花の屑しか残さないのか、まだ私には分かりません。

【答】 誰もそんなことは言っていない。どんなに不信な唯物論者でも、霊的個性を永久に失うことはできません。前に申し上げたのは、唯物論者の場合には、意識は全部か、部分的に消失するということですので、この人の人格我の意識の遺物は残りません。

【問】 しかし、それは絶滅ではありませんか？

【答】 決してそうではありません。長い汽車旅行の時、死んだように眠り、いくつか駅を知らぬ間に過ぎてしまい、少しも覚えていず、意識もしていないことがあります。そして別の駅で目が覚め、旅路の終わり、すなわち、目的地に着くまで他の駅をたくさん通つて旅行を続けます。三種類の睡眠のことは話しましたが、夢のない眠り、混沌とした夢を見る眠り、そして夢が極めて鮮明なので現実と区別がつかない夢を見る眠りです。もしあなたがこの三つめの夢があると信じるならば、なぜ夢のない眠

りの状態も信じることができないのでしょうか？ あの世の人生は、人間が信じ期待していた通りになります。来世を予期しない人は二生の間の合間は絶滅と同じ、絶対的な空白となります。これはまさに私が言ったプログラム、唯物論者自身が作ったプログラムが実際に行なわれていることです。しかし、あなたが言われるように、唯物論者にもいろいろあつて、自分以外の誰のためにも決して涙を流したことがなく、従つて不信心な上に、全世界に全く無関心である、利己的で邪悪なエゴイストは、死に際して人格我を永遠になくさなければなりません。この人格我は周囲の世界に伸びる同情の蔓^{つる}がなく、従つてストラートマに絡みつくものがないので、最後の息が出されると、人格我とストラートマの絆が切れてしまいます。このような唯物論者にはデヴァチャンはないので、ストラートマはほとんど直ちに再生するでしょう。しかし、不信心である以外、何の間違ひもしてない唯物論者は一つの駅を寝過ぐすだけです。そしてかつての唯物論者が永遠の中で自分自身に気がつき、永遠の生命から自分が一日でも、一停車場でも失つたことを悔いる時がくるかもしれせん。

【問】 でも、死は新しい生命への誕生とか、もう一度永遠に戻ることを言うほうが正しいのではありませんか？

【答】 お好みならそう言つてもかまいません。ただ、誕生にはいろいろありますし、自然の失敗である「死産」もあります。その上、物質生命についての西洋の決まつた考えでは、「生きている」という言葉と「存在している」という言葉は死後の存在の純粹に主観的状态に当てはめることは全くできません。それはまさに次のような理由からです。つまり、人々に著書が読まれておらず、自分自身でも混乱してうまく説明ができないわずかな哲学者達は別として、生と死についての西洋の考え方はたいへん狭くなつてしまつたので、一方では全くの唯物主義となり、他方では心靈主義者達が「常夏の国」として言つている、一層物質的な来世の概念となつたからです。「常夏の国」では人間の魂は食べたり飲んだり結婚したりして、マホメットが言う天国のように、しかも、それよりもつと哲学的なものが乏しく、全く官能的な樂園で生活をすると言います。教育のないキリスト教信者の一般的な考えも同様であるか、あるいは、どちらかと言えばもつと物質的です。手足を切つた天使や真鍮^{しんちゆう}のラッパ、金の^{たてごと}豎琴、物質的な地獄の火など、キリスト教の天国はクリスマスのパントマイム劇のおとぎ話の芝居のようです。あなたが理解しにくいと思われるのは、このような狭い

概念のためです。東洋の哲学者達が死後の生活を睡眠中のヴィジョンにたとえるのは、肉体を脱した魂の存在は、はっきりした夢の中のように生き生きとした現実性をもってはいますが、この世の生命の濃密な客観的形体をもっていないからです。

明確なものを表す明確な言葉

【問】 人間の本質のそれぞれの機能について私達の考えがこんなに混乱するのは、一つ一つの本質を示す明確で一定の用語がないからだと思いますか？

【答】 私もそう思っていました。この混乱はみな次のことから来ています。つまり、人間の本質について説明し議論するのに、私達はサンسكريット語を使い、神智学徒のために、それに当たる英語をすぐに作らなかったことです。今、私達はこの混乱を矯正して行かなければなりません。

【問】 これ以上の混乱を避けるために、そうなさったほうがよいでしょう。神智学についての著者は誰もこれまで同じ本質に同じ名称をつけていないように思います。

【答】 混乱は実際そうひどくはありません。何人かの神智学徒が人間の本質についてのいくつかの論文に驚きを示し批判してきましたが、調べてみると三つの本質を区別しないで「魂」という言葉を大ざっぱに使っている以外はひどい間違いはありませんでした。神智学の著者の中の最初でしかも最もはっきりとした解説者A・P・シネット氏は積極的に「高級我」についていくつか分かりやすい、優れた論文を書いています（神智学協会、『ロンドン・

ロッジの議事録』七番、一八八五年十月号参照)。彼は「魂」という言葉を一般的な意味で使っているので、彼の本当の考え方は何人かによって誤解されてきました。ここに数節を引用して、この問題についてシネット氏が書いていることすべてがどんなに明白で分かりやすいかをあなたにお見せしましょう。

人間の魂は一たび人間個性（注：彼はこれを「輪廻する自我」または「人間魂」と言い、ヒンズー教徒の言うコーザル体）として進化の流れに入ると、物質存在と比較的に靈的な状態とをかわるがわる通って行く。人間の魂は一つの界または一つの層、すなわち自然の一状態から、カルマ的親和力の指導のもとに、他の界へ移って行く。つまり、カルマが前もって決めた人生に化身して生き、環境の様々な制限の中で進歩し、機会を活用したり悪用したりして新しいカルマを作り、肉体生命を終えてカーマ・ローカという中間状態を経て靈的状态（デヴァチャン）に戻って行く。そして休息し元気を回復し、地上すなわち肉体存在の間に得た人生の経験を、宇宙的な進歩として自分の本質にだんだんと吸収させるのである。その上、この考え方はこの問題をよく考える人には副次的な推論をたくさん暗示したことだろう。例えば、カーマ・ローカからデヴァチャン状態へ移ることは当然、段階的である（*）。実は、様々な靈的状态を分ける厳密な線はない。その上、生きている人のサイキック能力が示すように、靈的な世界と物質界とは物質的な理論が示すほど遠くかけ離れているものではない。自然の全ての界層は同時に私達の周囲にあり、異なる知覚力に働きかける。……サイキック能力のある人々はこの世に生きている間も超物質的意識の世界とある程度つながりがあることは明らかである。現在の多くの人々にはこのような能力は与えられていないかもしれないが、睡眠現象や特

『神智学の鍵』

著：H・P・ブラヴァツキー
訳：田中 恵美子

電子書籍 Kindle 版
定価 1000 円

【本書について】

本書は、H・P・ブラヴァツキーによって1889年に出版されました。それは、大著『シークレット・ドクトリン』の翌年のことであり、たいへん難しい神智学の内容を入門者向けに解説することと、当時様々な批判にさらされていた神智学協会と彼女自身の風評に反論するために書かれました。ブラヴァツキー自身の手による神智学入門書です。



に夢遊病やメスメリズムの現象が示すように、五官に何の関係もない意識状態に入ることがあり得る。私達つまり私達の魂は、いわば物質の大海でただ漂流しているのではない。私達は明らかに、しばらく自分が漂っていた岸辺に戻る興味や権利をまだ持っている。従って化身の過程とは、物質界と霊界とに交互に存在するものと言ったり、魂は一つの存在状態から他の状態へ完全に移って行くと思ったりするのは化身の過程を十分に表現していない。化身とは魂から発散する流出物によって自然界の一界である物質界で引き起こされることと言えば、おそらく化身の過程のもっと正確な定義となろう。その間中ずっと霊的領域が魂の本来の住み処であって、魂は決してそこから完全に離れはしないだろう。そして永久に霊界に住む魂の物質化できない部分は、おそらく高級我 (Higher Self) というのが適切であろう。

* しかしながら、この「移ること」の長さは肉体を脱ぎ捨てた自我の前の人格我の霊的度合いによる。生活が極めて霊的であった人々にとっては、移ることは段階的ではあるが極めて早い。物質的なことに偏っている人の場合、その時間はもっと長くなる。

この「高級我」はアートマンです。もちろん、シネット氏が言うように、「物質化できない」ものです。その上、どんな場合でも、最高の霊的知覚にとってさえも客観的ではあり得ません。なぜなら、アートマン＝高級我はまさに、ブラフマンすなわち絶対者で、それとは全く違いはありません。三昧の時にイニシエートの高級な霊的意識は全くその一つの本質に吸収され、全体と一体となるので、その意識にとって客観的なものは何もありません。ある神智学徒は Self (我) と Ego (自我) という言葉を同義語として使い、Self という言葉を人間の高級個性または人格的自我とさえも結びつける習慣があります。けれども Self という言葉は唯一の普遍的な我以外に当てはめるべきではありません。そこから混乱が起きるのです。マナスすなわちコーザル体について言うと、ブッディの光輝と結びつけば「高級自我」(Higher Ego) とは言えますが、「高級我」(Higher Self) とはなりません。なぜなら、ブッディすなわち霊的魂でさえ Self (我) ではなく、「我」の媒体にしかすぎないからです。低級な「我」について話したいと思ったら、必ず「個性我」や「人格我」というようにそれを性格づけ、特徴を表す言葉をつければなりません。

例えば高級我について説明するこの優れた論文では、Higher Self、高級 Self という言葉が第六本質すなわちブッディに適用されています。もちろん、マナスと結合したブッディです。そうした結合がなければ霊的魂の中には考える本質はあり得ないからです。その意味で Higher Self という言葉を使うことが誤解を起こしたのです。「子供は七歳になるまで第六本質を得られない、つまり、七歳になるまではカルマを生ずる道徳的責任がもてる存在にならない」と言われていることは、高級我がブッディを意味していることを明らかにしています。従って、「高級我」がある敏感な有機体の中だけですが、人間に入り込み、自らの意識を人格我に浸み込ませたあとには、「サイキック能力のある人々は時おり精妙な感覚によってこの高級我を認識できる」とこの有能な著者が説明しているのは全く正しいでしょう。しかし「高級我」という言葉を普遍的な神聖原理に限定する人達がシネット氏を誤解するのももっともです。なぜなら哲学用語の意味が変わること (*) を知らないで、「高級我は物質界に完全に現れながら、その霊的性質に相応する高い自然界での意識ある霊的自我のままである」と言っているところを読むと、私達はこの文章の「高級我」はアートマンであると見、霊的自我はマナスまたはむしろブッディ・マナスと見やすいので、全く正しくない批判しやすいのです。

* 「哲学用語の意味が変わること」はここでは東洋言語の表現の英訳が変わったことを言っている。今日まで英語にはこのような言葉はなかったので、神智学徒はみな自分の思想を表すために、自分自身の言葉をつくらなければならなかった。それで、今こそ一定の専門用語を決めてもよい時である。

以後、このような誤解を避けるため、東洋のオカルト用語を文字通り英語にして使って行きたいと思います。高級我 (Higher Self) とは、

アートマンすなわち普遍的で唯一なる私の分離できない光線である。これは我々の内なる神というよりも、上なる神である。自分の内なる自我を高級我で満たすことに成功する者は幸いなるかな！

(a) 霊的神聖自我 (Spiritual Divine Ego)

心の本質であるマナスと密接に結合した霊的魂、すなわちブッディである。マナスとの結びつきなくしてブッディは自我であり得ず、単にアートマンの媒体にしかす

ぎない。

(b) 内なる自我すなわち高級自我 (Higher Ego)

ブッディとは無関係のマナス、すなわちいわゆる第五本質である。マインドの本質はブッディと一体になった時のみ靈的自我となる。唯物論者はどんなに知的能力があっても、このような靈的自我はないと考えられる。高級自我、永続的個性、「輪廻する自我」である。

(c) 低級自我、人格自我 (Lower Ego)

動物的本能、情欲、欲望などの低級我と結びついている肉体人間である。これは「仮の人格」と言われ、肉体および肉体の幽体または複体を通して活動しているカーマ・ルーパと結合した低級マナスで出来ている。

あとの本質「プラーナ」すなわち生氣は厳密に言えば、普遍的生命と唯一なる我としてのアートマンの放射している力、またはエネルギーである。プラーナはアートマンの低級な面、あるいはむしろ、顕現しているの、事実上もっと物質的な結果を生じるアートマンの局面である。プラーナは客観的宇宙にあまねく浸透しており、また、生きている人間に絶対に必要な要素であると言うので、一応一つの「本質」と言われているのです。

【問】 この分け方の組み合わせのほうがずっと簡単でよいと思います。他のものはあまりにも形而上学的でした。

【答】 神智学者も局外者も賛成して下さるなら、きっと問題がずっと分かりやすくなるでしょう。

BOOK CLUB KAI

スピリチュアルのブックショップ
www.bookclubkai.jp



INFORMATION

〒107-0062 東京都港区南青山 2-7-30 B1F

TEL : 03-3403-6177 FAX : 03-3403-9849

OPEN 12:00~20:00 定休日: なし

MAIL : info@bookclubkai.jp

半蔵門線、銀座線、大江戸線 “青山一丁目” 5 番出口より徒歩 4 分

銀座線 “外苑前駅” 4 番出口より徒歩 8 分



実践的オカルティズム

著：H・P・ブラヴァツキー

訳：田中 恵美子／ジェフ・クラーク

本書について

H・P・ブラヴァツキー夫人は、『シークレット・ドクトリン』などで近代神秘主義の基礎となった神智学体系を世に伝えた時、これは個人が見いだしたことでなく、自分を指導してくれた大師方に至る、「神聖な科学」に精通した幾世代ものオカルティスト達の研究概論であると主張した。

夫人によると、この「科学中の科学」は昔は全世界に広がっていたが、今、東洋の奥まった所にしか残っていない。しかし現在、科学と宗教が統合される新時代の夜明けに、この道の厳しい条件を満たす人は誰でも、大師方から指導を受けることができる。

神聖な科学即ち「オカルティズム」の存在、その危険と可能性を現代人に知らせることは、ブラヴァツキー夫人の使命であった。本書は、オカルティズムの実践について夫人が著した基本的な論文がすべて集まっている。それは、愛他心の重要さ、同胞団のルール、大師方の存在、弟子道の条件、修行の準備など、道のさまざまな面に触れる。また、弟子道の志願者のための『秘教部門の教え』の真髓が、本書ではじめて邦訳された。人のためになる実践に向かって進みたいと願う真剣な学徒にとって貴重な手引きとなる。

序文

H・P・ブラヴァツキー夫人の作品は、古代人の巨大な知識を集約しただけでなく、さらに重要な、その知識の基礎である「神聖な科学」のいろはを私達に伝える。ブラヴァツキーによると、太古のこの科学はかつて世界中に広がっていたが、周期的な状況のために、現在西洋の国々でほとんど死に絶えてしまった。しかし東洋では、神聖な科学はいまだに存在し実践されており、インドでダプタ・ヴィディヤー即ち「秘密の科学」、「秘められた智慧」と呼ばれている。

この基礎的概念を十九世紀の知識人達に伝えるために、ブラヴァツキー夫人はグプタ・ヴィディヤーに当たる訳語を見つけるのにたいへん苦労しかに違いない。『ベールをとったイシス』などの初期の作品でそれは magic あるいは occultism と言われていたが、magic は手品や魔法や儀式的魔術というニュアンスをもっているため、あとの作品にはあまり使われなくなった。esotericism (秘教) や the Sacred Science (神聖な科学) など、ほかの訳語が用いられることもあるが、結局 occultism は、誤解を招くところもあるものの、当時の読者達に一番なじみのある言葉として採用された。

ブラヴァツキーの言っている「オカルティズム」は当然、心霊現象や「超自然的なこと」を漠然と指す現代の「オカルト」とは全く違う意味である。夫人のいうオカルティズムは、人類と同じくらい古い「科学中の科学」で、人間の最高の成就である。神聖な科学は近代科学と同様に、普遍的真理を探求するために厳密な方法を用いるので、科学と言える。しかし、道具と教育と動機という面において、神聖な科学と世俗的な近代科学は大いに異なる。

物理的な観察をするために近代科学は様々な装置に頼るが、神聖な科学は物理的及び非物理的な観察をするには、主に、清められた人間の心の認識力に頼る。(一人の観察

は幾代もの先輩達の観察と照らし合わせて真正さが確かめられる。) 最高の研究道具であるこのような浄化された心を養うには、当然、記憶力や競争力を育てる近代教育法と違うトレーニングが必要である。この訓練は、神聖な科学に精通した師匠の下で行なわれるので、弟子道と言われる。弟子道の主要な目的は、弟子の心から一切のエゴイズムを除き愛他の精神を育てることである。愛他心は神聖な科学のアルファとオメガだからである。弟子道の志願者の心が試され清められる、数年にわたる見習い期がうまくいけば、志願者は最初のイニシエーション(秘伝)を授かり、弟子として受け入れられる。

はるか昔から神聖な科学の伝統を守ってきた国際的な組織かおる。ブラヴァツキーはこれを簡単に「同胞団」と言う。釈尊、イエス、プラトン、聖徳太子など、世界の偉大な聖者達と哲学者達はこの秘密結社の「同胞達」である。すべての宗教と哲学は、この智慧の大樹の枝にすぎない。同胞団の指導者達である「大師方」は優れた美德と神通力を持っているので、神聖な科学の訓練を受けていない透視能力者によって神や天使と間違えられるが、肉体や精妙体(応身)をもつ紛れもない人間である。

大師達はインドで「リシ」や「マハートマ」と呼ばれ、仏教の「菩薩」と道教の「聖仙」に当たる。仏教では同胞団全体の象徴は観音である。観音さまと同じように同胞団は、いろいろな方法と形で人類を助けてくださる。その活動は周期によって違ってくる。昔、同胞団はもっとオープンに働くことができた時代もあったが、現在その仕事は秘密裏に行なわれる。たまに同胞団はブラヴァツキーのような「使者」を遣わすこともあるが、原則として同胞団のメンバーは自分がそうであることを決して言わないし、むしろそれをできるだけ隠そうとする。同様に、神智学協会を含めて、同胞団を代表する団体はあり得ない。従って、自分が大師であり、大師方に指導されているなどと公言する人と団体はほとんど例外なく、にせものである。

どの時代にも弟子道を進むことは極めて難しいことである。しかし、現在は旧時代と新時代の勢力が互いに戦っている過渡期なので、オカルティズムに近づこうと思う人はさらに厳しい誘惑と困難に直面する。「周期的に回ってくる闘争では多くの人々が暗黒時代の勢力の餌食になっており、世界は今多くの妄想に耽っている。このような妄想の一つをいだいている人々は、何ら大きな犠牲を払わずに、かなり簡単に黄金の門に行き着き、オカルティズムの入口をくぐるができると思込んでいるのである」(本書第一部の二「オカルト道とオカルト技術」より)。インス

タントな幸福を看板にする団体と師匠達、幽体離脱やチャクラ行法を教える著者と出版社は、病氣、精神異常、馮依、絶望、自殺に至る道へと探求者を誘い込んでいる。

実践的オカルティズムは人間と宇宙の最も強力なエネルギーを呼び起こす道であり、私達現代人にとって完全に未知の領域であるために、非常な慎重さを必要とする。この道を進んで成功したブラヴァツキー夫人は私達が直面している迷いと危険をよく理解して、慈悲と自信をもって私達に誠実なアドバイスを与えてくれる。彼女は短刀直人に話すので、あまり説明を加える必要はないが、現代の探求者にとって最も肝要な点をまとめてみれば、次の通りである。

(1)オカルティズムの実践は趣味道楽ではなく、むしろ、人間にとって最も困難な成就である。現代文明の教育法と価値観はオカルティズムの原理に反しているため、私達現代人にはなおさら難しいものである。

(2)従って、オカルト理論の研究からオカルト実践に移る前には、精神的、道徳的、肉体的な準備が絶対に必要である。性エネルギーを完全にコントロールする純潔さは、道に入る必須条件である。

(3)愛他心と無私無欲は道の原動力である。言い換えれば、本当のオカルティストの目的は自分の発達によってできるだけたくさんの人達を益することであり、専門知識と神通力はそうした博愛的な努力の副産物にすぎない。道に入る動機が少しでも利己的なものであると、黒魔術という邪道に陥る。

(4)身内と社会に果たすべき義務責任を捨ててオカルティズムに入る人は必ず失敗する。

(5)実践的オカルティズムは信頼すべき師匠の下でしか行なうことができない。もちろん、師匠自身は造詣が深くて高潔な方でなければならない。どんな形であろうと、まことの師匠と団体なら、実践的オカルティズムの指導を売ることではない。

(6)霊媒道とオカルティズムの弟子道の方法と結果は正反対である。降霊術とチャネリングで霊媒と参加者達は受動的になるが、オカルティズムは最高度の積極性と用心深さを弟子に要求する。

(7)オカルティズムの厳しい必須条件をそのまま満たす用意のない人は、オカルト行法と実践に全く触れないほうがよい。

本書はオカルティズムについてのブラヴァツキーの論文を四部に分ける。第一部は基礎的な論文である。第二部は

マハートマ達の性質とチェーラ達（弟子）の道を扱う。第三部は、秘教部門という実践的オカルティズムを真剣に研究する神智学徒のグループの教えの抜粋である。第四部は、ブラヴァツキー夫人と他の神智学徒達の対話に基づいた論文である。よりよく理解する助けに各部に前書きをつけ、第四部のあとに簡単な用語解説をつけ加えた。

H・P・ブラヴァツキーは、オカルト・リハイバルを開いた人として深い責任を感じた。そのために、オカルト道の本当の目的を示しながら、その危険と落とし穴をはっきりと指摘してくれたのである。このような警告をネガティブと感じる読者もいるだろうが、ブラヴァツキーの教えは全体として人間の未知の可能性を肯定し、すばらしい新時代の必然性についての確信を伝える。

弟子道の厳しい条件を満たすことのできる人は、ごく少数である。しかし、オカルティストにならなくても、オカルティズムの目的、即ち人類を益することは十分にできる。例えば、メスマリズム即ち気孔のような「オカルト技術」を学んでたくさんの人々を助けることができる。自分の能力や限界を冷静に評価するなら、ほとんどの学徒はオカルトの実践を来生に回し、今生その準備だけに集中する。しかし、実践的なオカルティズムにチャレンジする人はどの時代にもいる。ブラヴァツキーは、特に各世紀の最後の二十五年、そのよう人達は同胞団に近づくチャンスを与えられると言う。

読者がどの道を選択しようと、私達は成功と安全をお祈りするしだいである

第一部 実践的オカルティズムの基礎

一八八七年にブラヴァツキー夫人がロンドンに移って『ルシファー』誌を始めた頃、ヨーロッパの雰囲気にもオカルティズムが漂っていた。心霊現象やオカルトの理論の研究だけでは満足できなくて実践をしてみたいと思う人達が急に増えていった。ブラヴァツキーはこの状況に応じて「ルシファー」に「実践的オカルティズム」(一)と「オカルト道とオカルト技術」(二)という論文で、神聖な科学の可能性と条件をはっきり指示した。夫人の死後、彼女の弟子達はこの二つの論文に「日常生活のための実践上の提案」(三)をつけ加えて『Practical Occultism』という単行本を出した。「日常生活のための実践上の提案」はブラヴァツキーの原作ではなく、『バガヴァッド・ギーター』や『ルシファー』などからの引用文を抄録したものである。オカルト実践についての論文は神智学徒達から様々なレスポンスを起こしたが、ブラヴァツキーは質疑応答(四)という形で二人の探求者達の問いに答えた(四の(1)、四の(2))。本書ではこれらの答えが、同じような話題の質疑応答(四の(3)、四の(4))と共にまとめられている。

もちろん、ブラヴァツキーは前述の論文で初めてオカルティズムを扱ったわけではない。彼女の最初の大作『ペールをとったイシス』の要約はオカルティズムを「魔術」と呼んでその基礎的原理を説明している(五)。その文章にもブラヴァツキーはオカルティズムの技術的な面だけではなく、どのようにして無私無欲の生活を送ればよいかというはるかに重要な問題に触れている。この問題は、ブラヴァツキー文集の最も深遠な論文に数えられる「大いなるパラドックス」(六)と、同じ頃に書かれた小論文(七、八、九、十)のテーマである。なお、もっと早い時期に出来た「霊的進歩」(十一)も題の通り、精神的な展開の道を示す基礎的な論文である。

一 実践的オカルティズム

オカルティズムの実践的な指導を求めている人達がたくさんいるので、次のことを説明する必要がある。

- (a)理論的オカルティズムと実践的オカルティズム、即ち「神智学」や「オカルト科学」といわれるものの本質的な違い。
(b)実践的オカルティズムの研究に伴う困難。

神智学徒になることはやさしい。普通程度の知的能力があり、哲学的なことに向いている人なら誰でもなれる。また、清純で非利己的な生活をし、自分が助けてもらうよりも隣人を助けることに喜びを感じる人、いつも他の人々のために自分の楽しみを犠牲にしようとしている人、利益を得ようと考えずに、真理、善、智慧を、真理、善、智慧であるが故に尊ぶ人は神智学徒である。

しかし、善悪を正しく識別して何をすればよいかを知る道、即ち、少しも身を動かさずに自分の望む通り善行を為す力が得られる実践的オカルティズムの道に入ることは全く別の問題である。

その上、学徒が知っておくべき重大な事実が一つある。つまり、師匠は弟子のために、ほとんど無限と言ってよいほどのたいへんな責任を取らなければならないということである。公然と、あるいは秘密裏に教える東洋のグルから、神聖な科学の基本を弟子達に伝える西洋のわずかなカバリストに至るまで——西洋のこのような「高僧方」は自分の招く危険について知らないことが多いのだが——師匠達は皆同じように、この神聖な法則に従っている。師匠達が本質的なことを教え始めた時から、つまり、サイキック、メンタル、肉体的いずれかの力を弟子達に与えた瞬間から、その弟子がイニシエーションを受け大師となり自分の弟子達に対して責任が取れるようになるまで、オカルト科学に関して弟子の一切の罪の責任を引き受けることになっている。罪とは、悪いことを為した「作為犯」だけではなく、為すべきことを為し損なった「不作為犯」も含んでいる。ギリシア正教では非常に重要視され実行されているが、ローマ旧教では半ば忘れられ、新教の教会では完全に絶えてしまっている不思議な法規がある。その法規はキリスト教のごく初期に始まっていて、今述べた師弟関係の神聖な法則に基づいており、神聖な法則のシンボルであり表現でもある。この法規によれば、子供とその名づけ親である教父母との関係は、完全に神聖なものである。教父母達は、新しく洗礼を受けた子が善悪を知り責任をもてる人間となる日まで、その子のあらゆる罪の責任を引き受けるのである（洗礼を受ける子供はイニシエーションを受ける者と同様に、油を注いで清められる。これはまさに、機密である！）。

そんなわけで、師匠達がなぜオカルティズムについて口が重く、弟子達が自分の適性を証明し、大師と弟子両方の

安全に必要な特性を身につけるために、なぜ七年もの見習い期間を勤め上げなければならないかが明らかとなろう。

* 子供と名づけ親の関係は、ギリシア正教会ではたいへん神聖なものと考えられている。それで、教父と教母の間の結婚は最も悪い近親相姦と見なされ、不法なこととして法律によって無効とされるのである。また、教父と教母の子供達との結婚も厳禁とされる。

オカルティズムは魔法ではない。^{まじな}呪いのことを習ったり、普通のエネルギーよりも精妙だが、肉体的、物理的性質の諸エネルギーを使う魔法を習うことは比較的やさしい。人間の中の「動物魂」の諸能力はすぐ目覚めるものである。愛、憎しみ、激しい感情によって呼び起こされるようなエネルギーは、容易に開発できる。しかし、これは黒魔術（Black Magic, sorcery）である。力の行使が、有害な黒魔術になるか、あるいは有益な白魔術になるかは、動機のみよる。力の行使者の中に、ごくわずかでも利己的な気持ちが残っていたら、霊的な力は使うことができない。なぜならば意図が完全に純粹でないと、霊的な力はサイキックなものに変わり、アストラル界で働いて、悲惨な結果を生ずるからである。動物魂の能力とエネルギーは、非利己的で寛大な心の人々でも、利己的な執念深い人達であっても、使うことができるものである。しかし、霊の様々な能力とエネルギーを使用できるのは、完全に心の清い人々だけである。そのような使用は、神聖な魔術である。

では、「神智」の学徒となるのに必要な条件は何だろうか？ 次の条件を満たし、何年もの間、条件を厳しく守りながら学んで行かなければ、実践的オカルティズムの指導を与えられる可能性はない。これは必要不可欠なことである。深い水の中に入らなければ、誰も泳ぐことはできない。鳥は翼が成長しなければ、また、空間が自分の前にあり空中に自分を託す勇気をもっていなければ、飛午ことができない。両刃の剣を振るおうと思う人が、その剣をはじめ振ってみる時に自分を傷つけるようなことから避けるために、また、もっと悪いことに、他人を傷つけるようなことを避けるために、まず刃のない武器で完全にマスターしておかなければならない。

神聖なものか黒魔術に変わるという危険を避けて、神智の研究を安全に進めて行くのに必要な諸条件のおおよその概念を伝えるために、東洋のすべての教師に与えられている「秘密の規則」の中から少し引用してみよう。次の数項はたくさん規則から選んだもので、「 」の中でその解説をして行くことにしよう。

(1)指導を受ける場所は、心を散らすようなことがなく、また、よい影響力を放出する（磁気のある）もので満たされているような所でなければならない。そこには、神聖な「五色」が円の中に集められているものがなければならない。その場所は、空中に漂っているいかなる有害な影響も受けてはならない。

〔その場所は、他の目的に使ってはならない。「五色」とは、ある形に配列された虹の五色である。その色は、磁力がたいへん強いからである。「一有害な影響」とは、不和、喧嘩、悪感情などによる妨害のことである。喧嘩などは直ちにアストラル光、即ちその場所の雰囲気的印象をつけ、大気中に漂うようになると言われていたからである。この第一条件は満たしやすいようにみえるが、よく考えてみると、最も達成し難いものの一つだということが分かる。〕

(2)弟子が「面と向かって」学ぶことを許されるようになる前に、他のウパーサカ（在俗の弟子）のえり抜かれた仲間と共に、基本的な理解力を身につけなければならない。その場合、仲間の数は奇数でなければならない。

〔「面と向かって」ということは、この場合は一人で、つまり他人と離れてという意味である。この時、弟子は自分自身（自分の高級我、神聖我）か、または自分のグルのいずれかと向かい合って教えを授けられるのである。この時はじめて、自分の知識をこれまでどのように応用したかということによって、当然受けるべき新しい教えを受けるようになる。これは修行の全期間の終わりに近づいた時にだけ起こり得ることである。〕

(3)『ラムリン』のよい言葉（聖訓）をラヌー（弟子）に伝える前に、また、デュブジェドの準備を弟子に許す前に、弟子の心が完全に浄化し、すべてのものの、特に自分と「他の自我達」と仲よくなっているように注意せよ。でなければ、智慧の言葉、妙法の言葉は散逸し、風に吹き上げられてしまうだろう。

〔『ラムリン』とは、ツォンカパによる実践的な教訓の著作で二つの部分から成っているものである。一部は聖職的で顕教的な目的で、もう一部は密教的な目的をもっている。「デュブジェドの準備をする」とは、鏡や水晶のような、透視のために使う道具を準備することである。「他の自我達」というのは、兄弟弟子のことを言っている。兄弟弟子の間に最大の調和がないと成功はしない。師匠は、陽と陰の要素を細心の注意を払って集め、調整しながら、弟子達の磁氣的性質と電氣的性質に従って、えり抜きのグループを作るのである。〕

(4)勉強中のウパーサカは、一つの手の五本の指のように統一しているよう注意しなければならない。仲間の一人を傷つけることは他の者達もみな傷つけることになる、師匠は弟子の心に印象づけなければならない。もし一人の喜びが他の者達の胸に反響しなかったら、要求されている条件は満たされておらず、学び続けても無駄である。

〔予備的な選択が磁気上の条件を満たしていれば、このようなことはほとんど起こり得ない。真理の受け入れに適している、他の面では前途有望な弟子が、痛癩を起こしやすく仲間とうまく調和することができないために、指導を受けるのを何年間も待たなければならなかったというケースもある。なぜなら……〕

(5)グルは兄弟弟子達を琵琶の絃のように、調子を合わさなければならない。絃はそれぞれ違ってはいるが、互いに調和して音を出さなければならないからである。兄弟弟子は一つになってグルの最も軽いタッチに答える鍵盤でなければならない。このようにして、兄弟弟子達の心は智慧のハーモニーに向かって開き、神智が各人すべてを貫く知識として振動することだろう。これは、主宰している神々（守護神、守護の天使）に喜ばれ、弟子に役に立つ結果をもたらすのである。だから、智慧は永久に弟子達のハートに刻印され、法則の調和は決して破られることはない。

(6)シッディ（神通力）に至る知識を得たいと思う者は、この世の空しい快樂や虚栄をすべて放棄しなければならない。

(7)自分だけは仲間の学徒とは違うのだと思うことは誰にも許されない。例えば「私はいちばん賢い」とか、「私は仲間より神聖だし、先生や周りの大達にいちばん好かれている」などと思う者は、ウパーサカの道をやめなければならない。ウパーサカは、いかなる生き物への敵愾心も追い払って、思いを我が心に向けなければならないのである。心は大自然のあらゆるものと非分離感で満たされるべきである。でなければ成功はしない。

(8)ラヌーは外界では生きているものの影響（生きているものからの磁氣的放射）だけを怖がればよい。従って内面的にはすべてのものと合致しながらも、あらゆる外部的影響から自分の外部の体を離しておくように気をつけなければならない。例えば、自分以外の人の食器から飲んだり食べたりして、他の人や動物と肉体的接触（触れることと触られること）をしてはならない。

〔愛玩動物も許されない。ある木や植物に触れることも禁じられている。弟子は、オカルト目的のために、いわば、自分自身の雰囲気^{アトモスフィア}を個別化するために、その雰囲気の中でのみ生きなければならないのである。〕

(9)弟子の心は、自然の普遍的真理以外のいかなるものに対しても、無感動でなければならない。でなければ「ハートの教え」が、「目の教え」(中味のない顕教的な典礼過重主義)に成り下がるからである。

(10)どんな動物食、即ち、命をもつものも、弟子は食べてはならない。葡萄酒もその他の酒も阿片も用いてはならない。こうしたものは不注意な人を捕まえる悪霊のようなものであり、理性を貪り食うからである。

〔葡萄酒やその他の酒はその製造に携わったあらゆる人々の悪い磁気を含み、その磁気を持ち続けると考えられている。動物の肉はいずれも、その動物のサイキック性質を保持しているのである。〕

(11)瞑想、禁欲、道徳的義務の遵守、やさしい思い、善い行ない、親切な言葉、すべての人々への善意、己れを忘れることは、知識を得て高級な智慧を受ける準備をするために、最も効果的な手段である。

(12)ラヌーは、前述の規則を厳密に遵守する時にのみ、時至れば、アルハットの力を得、次第に「普遍的全」と一体となるように成長することを期待できるのである。

これら十二の規則は、七十三から成る規則の中から抜粋したものである。七十三すべてを列挙しても、ヨーロッパでは意味が通じなくて無益であろう。わずか十二の規則でも、西洋に生まれ育った人にとってウパーサカの道を進むことが、どんなに難しく障害が多いかを十分示している。

* あらゆるチェーラ、在家弟子達でさえも、第一秘伝のあとで「ラヌー・ウパーサカ」となるまでは、「ウパーサカ」と呼ばれるのである。秘伝を受ける-までは、ラマ僧院に住んでおり特別な指導を受ける者達も「在家」と考えられている。

西洋、特に英国の教育はすべて競争と闘争の原理で満ちあふれている。どの子供もより早く覚え、自分の仲間を追い越し、あらゆる分野で仲間を越えるように促されている。「親善競争」と間違って言われていることが、う倦まずたゆ

まず植えつけられ、日常生活のすべての行ないに競争心はぐくまれ、強められている。

子供の時からこのような考えを叩き込まれた西洋の人々が、仲間の学徒達に対して「一つの手の五本の指のように統一している」と感じられるようになることが、どうしてできるだろうか？ 仲間の学徒達も、自分自身が選んだわけではないので、必ずしも自分と気が合ったり自分が高く評価する者ではない。師匠によって全く別の理由で選ばれるのである。そして学徒となりたがっている者はまず、他の人を嫌ったり、反感をいだくことなどを、一切心の中から追い出すほど強くならなければならない。熱心にこれをやってみようとする西洋人が多くいるだろうか？

その上、日常生活のこまごましたことを支配するルールや、親しい人の手にさえ触れるなどの命令などがある。それは愛情や好感についての西洋の概念に何と反することだろう！ 何と冷たく、きつく思えることだろう！ また、自分自身の進歩のために他人に楽しみを与えないようにするのは利己的すぎると西洋の人は言うことだろう。よろしい。そう考える人々には熱心に道に入ることを、次の生まで延ばさせよう。しかしその人達に、想像上の非利己心を自慢させないようにしよう。なぜなら、自分のことを非利己的だと思うのは、本当は一種の自己欺隔で見せかけにしかすぎないし、情緒主義や感傷に基づいた月並みな考え方か、中身の無い社交生活のつまらぬ「礼儀」であり、真理の命ずることではないからである。

このような難しい条件は「外的」と考えられるかもしれないが、非常に重要なものである。しかしそうした条件を別にしても、西洋の学徒達はどうやって、右に要求されたような調和に心を合わせることができるのだろうか？ ヨーロッパやアメリカでは自己中心が非常に強くなっているので、メンバー達が互いに憎しみ合ったり、嫉妬し合ったりしていない芸術派は一つとしてないのである。職業上の憎しみや妬みは周知のことになっている。人々はどんな犠牲を払っても自分の利益を計るし、いわゆる「礼儀」でさえも、憎しみと嫉妬の悪魔を隠すうつろな仮面にしかすぎないのである。

東洋では「万物非分離」の精神が、西洋の競争心のように、子供の時からしっかりと教え込まれる。個人的な野心、個人的な感情や欲望が強くなるようには躰けられないのである。もともと心の土壌が良ければ子供が正しく育てられ、低級我が高級我に従う習慣が強く根づいた大人に成長するのである。西洋人にとって、他のものに対する好き嫌いは、行為に方向を与える原理である。たとえそれを自分の生活の大法則とせず、また他人にそれを押しつけようとしない

場合でも、西洋人は好き嫌いに従って行動する。

神智学協会であまり学ぶことはなかったと不平を言う人々には、昨年（一八八七年）二月の『道』に出た論文の言葉を心に留めてもらおう。つまり、「各段階では、まことの鍵は求道者自身である」ということである（編註）。「智慧の始まり」は「神への恐れ」ではなく、内なる我の知識である。その知識こそ、まことに智慧そのものである。

前述の真理をいくらか理解し始めたオカルティズムの学徒にとって、オカルトの智慧を求めに来たあらゆる者にデルフォイの神託が与えた答えは何とすばらしく、深い真実を表していることだろう。その言葉は賢明なソクラテスによって繰り返され、実践された

「人よ、汝自身を知れ」

【編註】『道』誌二卷十一号、一八八八年二月号、三三〇頁。ウィリアム・クアン・ジャッジは、ウィリアム・ブレホンというペンネームで『バガヴァッド・ギーター』第二章を分析して、秘伝を授ける地球の最初の学校について次のように言う。「その学校は秘密なのである。というのもそれが、自然の秩序そのものに基礎を為しており、指導者が皆まことの大師方（Hierophants）なので、まことの鍵がなければ奥まった所に足を踏み入れることが許されないからである。そして各段階では、まことの鍵は求道者自身である。求道者は実際上、そのしるしと鍵になるまで、次の段階に上がることはできない。このようにして、学校全体だけでなく、各段階も、招かれざる者が入ることができないように自らを保護しているのである」。（訳註。ここで秘伝の「学校」といわれるのは、一定の場所にある施設または学派ではなく、大師方の同胞団、光のヒエラルキアそのものである。編註はブラヴァツキー文集の編纂者B・ジルコフによる。）

『オカルト化学』 OCCURT CEMISTRY

著：C.W. リードピーター
アニー・ベサント

訳：STO 斎藤潤翻訳事務所

電子書籍 Kindle 版 1000 円

単行本 3400 円

【本書について】

3次元世界の探求のみの現代物理学とは違い、神の創造された世界から見て、3次元物質世界と4次元以降の霊的世界を探索&研究した神智学が、H.P. ブラヴァツキーのよって1800年代に始まりました。本書は、19世紀最大のオカルティスト、H.P. ブラヴァツキーの最愛の弟子リード・ピーターおよび、アニー・ベサントによる化学構造物の霊的透視研究の報告書です。現代物理学を超越して物質の正体に肉薄し、究極の物理的原子（アヌ）を解明しており、例えば水素は18個のアヌ、金は3546個のアヌによって構成されていることが判明しており、18で割ると現代物理学の周期律表にも合致しています。霊的物理学に興味のある方は必読の書籍です。



詳しくは UTYU PUBLISHING のHPで www.utyu-publishing.com

神智学協会ニッポン・ロッジ 勉強会のお知らせ

神智学協会ニッポンロッジでは、「神智学研究会」として毎月1～2回、神智学書籍の解説や講義、意見交換等を行っております。神智学の知恵を深めていただくためにもぜひご参加ください。日時はホームページ (<http://www.theosophyjp.net/>) にてお知らせしております。また、神智学の教えを広めるため、各地で勉強会を開催していただける方を募集しております。ご興味ある方は、神智学協会ニッポン・ロッジまでご連絡ください。

関東地区

【日程】 HP (www.theosophyjp.net/) にてお知らせします。

【時間】 10時～12時

【場所】 東京芸術劇場 会議室

東京都豊島区西池袋 1-8-1 JR 池袋駅西口より徒歩3分

【費用】 会員 1,000円 非会員 2000円

四国地区

【日程】 毎月1～2回

【場所】 HPにてご確認ください。

【費用】 無料

神智学協会ニッポン・ロッジ ご案内

神智学協会ニッポン・ロッジは、世界各地に支部を置き活動している神智学協会(The Theosophical Society) 国際本部インド・アディヤールの日本支部です。神智学協会ニッポン・ロッジは、神智学協会の目的の遂行と神智学協会が提唱する神智学の教えの普及活動を行っています。

神智学協会の目的

- 1) 人種、信条、性別、階級、皮膚の色の相違にとらわれることなく、人類愛の中核となること。
- 2) 比較宗教、比較哲学、比較科学の研究を促進すること。
- 3) 未だ解明されない自然の法則と人間に潜在する能力を調査研究すること。

- 神智学協会ニッポン・ロッジの会員は、神智学協会国際本部（インド・アディヤール）の会員名簿に登録されます。
- 神智学協会ニッポン・ロッジの会員制度は1年ごとの会費納入（年会費5,000円）による更新制となります。
- 神智学協会ニッポン・ロッジの会員は、会報誌「テオソフィア」の配布を受けます。（海外の方はEメール版）

神智学協会ニッポン・ロッジ 支援基金

神智学協会ニッポン・ロッジでは、神智学の教えを普及するために会の活動を支援することを目的として、神智学協会ニッポン・ロッジ支援基金を設立し皆様からの寄付を募っております。

支援基金：一口 1,000円

納入方法：銀行振り込み

納入口座：ゆうちょ銀行 00八支店

普通 98936871 神智学協会ニッポンロッジ

ゆうちょ銀行からの専用振替口座

記号：10070

番号：98936871

神智学協会ニッポンロッジ

会報誌について

神智学協会ニッポン・ロッジ会報誌「テオソフィア」は2ヶ月ごと、年6回発行されます。会報誌についてのお問い合わせは、メール又はお手紙にてお願いいたします。【Eメール】 info@theosophy.jp

【住所】 〒289-0617 千葉県香取郡東庄町羽計 2565-7 神智学協会ニッポン・ロッジ 【編集部】 當麻・岡本

